

4年生になってもう一度解剖に取り組む機会をいただき、改めて人の体の複雑さや、いかに効率的に身体を動かしているのかを感じました。1年生のときにも解剖を経験しましたが、その頃はまだ知識も浅く、とにかく名称を覚えるのに必死だったなと思います。今回、改めて向き合ってみると、当時は曖昧だったことを思い出す場面もあれば、しっかり自分の中に残っている知識もあって、成長を感じられました。特に、1年生の時に確認できなかった甲状腺を今回は実際に見ることができ、嬉しかったです。

今回の実習では、病気の病態や治療と関連づけながら構造を確認できたのが印象的でした。「この神経が障害されるとこんな症状が出る」「この血管は手術のときに注意が必要」といったように、臨床の知識とつなげることで理解がより深まったと思います。知識をただ詰め込むだけの学習から、実際の医療に近い形で学べました。また、実際の手術と似た方法で解剖を進めた時に、術野が狭いと構造がどこも見えづらく、全体の把握が難しいと実感しました。特に印象に残ったのは、最初に受けた内視鏡の講義でした。内視鏡に解明するのが初めてで、直接臓器を目で見ることができず、画面越しに観察するため、空間把握の難しさを強く感じました。自分の針がどこにあるのか、今見ている構造物が体の中のどの位置にあるのか理解していないと、安全に操作できなことを実感しました。解剖学の知識を持っているだけでなく、それを臨床でどう応用するかを考えながら取り込む大切さを学べたと思います。

そして何よりも、このような学びの場を与えてくださったご献体の方には、これから感謝しています。自分の身体を全く知らない学生のために、未来の医療のために託すことはなかなかできないことだと思います。だからこそ、医学生にとって強い責任を伴うものであり、「しっかりと勉強して医療の担い手にならなければ」という気持ちを再確認することができました。その思いに応えられるように、学んだことをこみからの学びや臨床に活かしていきたいです。また、丁寧に指導してくださった先生方にも深く感謝しています。解剖の知識だけでなく、学ぶ姿勢や考え方にについても多くのことを教えていただいたと思います。

今回の実習を通して、人の体は複雑でありながら効率的に動くようにつくりかていて、一つも欠ければ病気や障害につながることを実感しました。解剖で得た知識や感覚を忘れない、こみからの学びや臨床実習に活かし、将来は患者さんに寄り添える医師になるよう努力を続けていきたいです。「初心忘るべからず」という気持ちを胸に、こみからの大学生活を大切に過ごしていきたいです。